

2022年6月12日 『神の子イエス』

高橋克樹牧師

申命記6章4〜9節、マルコ1章9〜11節

本日の聖書箇所はイエスが洗礼を受けた場面です。9節以下を見ると、イエスが洗礼をうけたとき、『天が裂けて、霊が鳩のように御自分に降って来るのを、ご覧になった』とあります。そのとき、神から『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者である』という声を聞いたとあります。イエスを神の子とする神の霊が降ったことを示しています。

また、14節にあるようにイエスは、『ヨハネが捕えられた』（原文では『ヨハネが引き渡された後』）に、イエスの主要な活動舞台であるガリラヤに行き、『神の福音を宣べ伝える』公生涯に入ります。神の子となる霊が降ってきて、自分に洗礼を授けた洗礼者ヨハネが逮捕されたことをきっかけに、イエスは公生涯にはいるのです。

洗礼者ヨハネの逮捕がイエスの神の国宣教の開始を誘発していることは確かです。原文にある『引き渡される』（パラデイドナイ）はイエスの受難を意味する言葉でもあります。ただ、洗礼者ヨハネが人間世界から荒野に退いたのとは反対に、イエスは荒野から当時の人間世界でも差別されていた地域であるガリラヤに赴くのです。15節には「今この時は満ち満ちている」「神の支配は近づいた」「悔い改めよ、そして福音を信じなさい」というイエスの宣教の3つの柱が出てきます。『時（カイロス）が満ちる』という表現は、一定の期間が満ちるといふこと。量的に満ちるといふことではありません。『近づいた』（エーングケン）という完了形を「到来した」と解釈することも可能ですが、これが「すぐそばまで来ている」（近づくと）という語に重点を置くか）と解釈するのか、それとも「もう既にここに来てしまった」（エーングケンの完了形に重点を置くか）と解釈すべきかどうかで解釈が変わってきます。イエスの生涯において神の支配が現在の事柄となっているのです。悔い改めは人間の業のように理解しがちですが、心の向きを変えて、思い煩いを自分の後ろに投げ捨て、イエスのもとに帰って行く（人間になること）ことです。

洗礼者ヨハネはこの世から荒野に退いて、自分の内面に向き合って、神に立ち帰るプロセスを選びました。ただ、このプロセスはイエスとは根本的に異なっているのです。ある意味、プロテスタント的なのです。自分の意志で神に帰依していく意識が強いのです。神と共に歩むために世俗の事柄を捨てるのです。一方、イエスは荒野からこの世の現実世界に赴いて、神に立ち帰るプロセスを選びました。この世の現実に向き合う姿勢が異なるのです。イエスはこの世の重荷を担うことで、神が創造された世界の中で生きるのです。担うことから見えてくる世界があると云うのです。

マルコ福音書が最初に書かれた福音書ですが、その立場はユダヤ教の信仰理解を引き継いでいます。ユダヤ教の信仰理解は個々の歴史的な経験を通して神は働くという信仰なので。エジプトの奴隷状態からの解放や王国の滅亡などの歴史的経験はすべて神との関係で理解されました、歴史的叙述というのは、過去に実際に生じた出来事がもつ意味を、その当の出来事の後に生じた事柄を視野にいれつつ、述べていくのが福音書の書き方です。マルコ福音書の記者はイエスがガリラヤで『神の福音』を宣教したと述べます（14節）。しかし、イエスの生前に「神の福音」という言葉は存在しません。この言葉はイエスの死後に成立した原始キリスト教会が、イエスの死と復活を中心とする福音を宣教していく時の、中心的なキー言語です。

ですから、14～15節でイエスが実際に語った言葉は「神の国は近づいた」だったでしょう。これに対して、「悔い改めて、福音にあつて信じなさい」というのは原始キリスト教会が宣教した言葉です。洗礼者ヨハネは「罪の赦しを得るためには神に立ち帰らなければならない（悔い改めねばならない）」と訴えて洗礼を施しました。一方、イエスは「わたしはあなたがたのただなかに来て罪を贖ったのだから、ただ神の国に入ればよい」と語ったのです。イエスによると、神の国は「力づくで襲われ」ており（マタイ11章12節）、人々のところに神の国は「来ている」（ルカ11章20節）と語る一方で、神の国に「入ることは難しい」（マルコ10章23～25節）ものの、子どもが受け取るように「受け入れる」（マルコ10章15節）ならば簡単に入ることができる」と語ったのです。このように神の国という神の支配はただ受容してい

くもの（そこに入る）であり、楽しめるもの（宴会に連なるようなもの）であり、思いがけない宝物を発見するようなものではないと言いました。16〜20節では、イエスは4人の漁師を見ず知らずのうちにただちに弟子としています。弟子の召しは見知らぬ4人の漁師を即座に召し出す。また、マルコ福音書ではイエスの宣教は最初から弟子と一緒に始まっています。

ここで『人間をとる漁師』という表現の面白さを考えたい。漁は魚の獲れる場所、時間帯を計算すればいいのですが、人間をとるためには、その魂に深い関心を寄せ、人間の心の諸相（喜び、悲しみ、苦しみ）が分かることが大切となります。魚を取る網では人間は取れません。魂が分かって、心と心が通い合うことが前提となります。

救済史における召しは、召される側の事情は一切考慮されません。ある日突然に召し出されるのです。『直ちに』ということは、今現在の仕事を途中で中座して何の後始末も行わないで従っていくということです。召される弟子の側にイエスに従って福音を宣べ伝えるための準備もなく、人間の側には何の必然性もないのです。あるのはただ神の必然性だけです。イエスが神の霊を受けて宣教に遣わされたように、イエスを信じて従っていくことの中に、私たちも神の霊によって導かれた人生が開かれていくのです。神の子イエスはこの世の苦難を担う道を選ばれたがゆえに、私たちの悩み苦しみをすべて担って十字架上に死にました。このイエスが神の子として私たちを神の支配の中へ招いて下さるからこそ、私たちは神の導きの中で人生を歩むことができるのです。しかも、そこに私たちの側に神の導きを受けるための条件が必要ではありません。イエスの弟子として召される際に、弟子としての条件が何もないことが福音書には描かれているのです。これこそが、私たちが神の導きに無条件で招かれていることの証なのです。確かに、弟子が召命される記事は突然に召される様子が描かれていますので、何か必然性がないように感じてしましますが、実はこの無条件の召命こそが、私たちに何の条件もなしに神の導きが与えられた人生を歩んでいくことを保証しているのです。ですから、神の召し＝神の導きは人間の側の何の条件もなしに、訪れるのです。私たちはこの恵みに応えるしかないのです。